

令和四年度

前期日程

# 国語問題 (H・F・J・E)

〔注意〕

- 一、問題冊子及び解答用冊子は、試験開始の合図があるまで開いてはいけない。
- 二、受験番号は、解答用紙の受験番号欄(計六か所)に正確に記入すること。
- 三、問題冊子のページ数は、表紙を除き合計十六ページである。脱落している場合は直ちに申し出ること。
- 四、解答用紙は三枚である。解答用紙をミシン目に従って切り離すこと。
- 五、解答は、解答用紙の指定されたところに記入すること。
- 六、問題冊子の下書き欄及び余白は、適宜下書きに使用してよい。
- 七、解答用紙は持ち帰ってはいけない。
- 八、問題冊子は持ち帰ること。

次の文章を読んで、後の問い(問一～問四)に答えなさい。

イソップ寓話の「北風と太陽」では、どちらが強いか言い争っていた北風と太陽が、旅人の服を脱がせるといふ勝負を行う(上着だけ脱がせればよいというバージョンもある)。北風は力いっぱい吹きつけて旅人の服を飛ばそうとするが、旅人は寒さを嫌ってしっかりと服を押さえるばかりで、疲れ果てた北風は太陽に番を譲る。太陽ははじめゆつくりと照りつけ、旅人が着込んだ服を脱いでいくのを見ながら、徐々に熱を強めていった。ついに旅人は暑さに耐えかね、自ら服を全部脱いで川へ水浴びに行く。

この北風と太陽の寓話には、「説得は強制よりも勝る」「厳しい態度でなく優しい態度で接したほうがうまくいく」というような教訓が付記されていることが多い。調べてみると、説得が強制よりも有効だという解釈はヴィクトリア期に定着したものらしく、この寓話の解釈は時代とともに少しずつ変わってきている。節度を守ることを説いた話なのだと考えた人もいれば、キリスト教の教えに引きつけて解釈した人もいた。

私自身はずいぶん後になって知ったのだが、次のような話が前に付け加わる場合もある。北風と太陽は、旅人の帽子をとる勝負を行っていた。まず太陽が旅人を燦々と照らして暑くしようとしたところ、旅人は日射しを防ぐためにかえって帽子を深くかぶってしまう。次いで北風が思い切り吹きつけると、帽子は簡単に吹き飛んでいった(その後は前記のとおり)。この気の毒な旅人の話の教訓は、「どんなことにも適切な方法があり、つねに最良と言える方法はない」ということである。

とうとうするものが何であるかにかかわらず、北風と太陽の寓話ではインセンティブをうまく扱えなかったほうが負けている。

インセンティブとは、「ある個人に特定の行動を選ぶように仕向ける要因」を指す言葉である。この“incentive”の語源をたどってみると、「音楽を力<sup>a</sup>でる」ことと「火をつける」ことの両方が関係していたという。これらは人の気持ちを動かすという

点で共通しており、要するにその氣を起こさせる外からの刺激がインセンティブなのである。太陽はインセンティブを意識的に使い、帽子をとる勝負では失敗し、服をとる勝負では成功を収めている。それとは対照的に、北風はどちらの勝負でもインセンティブを使おうとしていない。それどころか、自分の意図しない方向に作用するインセンティブを旅人に与えてしまつてもいる。

このインセンティブという考え方は、社会科学の支柱としての役割を陰に陽に果たしてきた。たとえば、経済学は金銭に関する学問と表現するよりは、インセンティブの構造に関する学問と表現したほうがジツタイに近い。経済学の主たる舞台である「市場」というものは、インセンティブを活用して人々の満足度を高めようとするしくみの一つと考えることができる。現在の経済学では、狭義の市場のみならず、インセンティブを提供するしくみや制度が広く視野に入れられている。

インセンティブを検討の対象とする学問分野は経済学だけではない。人間行動を探究する際には必然的にその原因や理由について考察を進めることになり、類似の概念が他の分野でもしばしば登場する。心理学の文脈では、インセンティブは外発的動機づけと大まかに対応している。金銭的・物理的な報酬や処罰だけでなく、他者からの承認・非承認などによつてもたらされる動機づけもここに含まれる。

外発的動機づけ(非インセンティブ)と対になる概念は内発的動機づけであり、こちらは賞罰に依存しない動機づけを指す。行動そのものが目的になっている状況、たとえば美術鑑賞やゲームをしている場面を一例として考えていただければよいだろう。

内発的動機づけと対比すると、インセンティブは外からただ一方的に与えられるもののようにも見えるかもしれない。しかし、インセンティブの妙は、「当の個人は自ら選択を行っていると思つている」という性質を備えている点にある。先の寓話の中で太陽のホウリヤクが説得や優しさになぞらえられているのは、旅人が「自発性」をもつ余地を——本当に自発的か否かはさておいて——太陽が残しているからであろう。このカギ括弧つきの「自発性」ゆえに、外発的なインセンティブと内発的動機づけの境界が明らかでないことも多々ある。

境界をどこに設定するにしても、法は外発的なインセンティブにも内発的な動機づけにも関わっており、他のさまざまな制度とならんで人間行動をコントロールしている。

法が人々の「自発性」を完全に封じてしまうこともあるが、たいていの場合、法は人々の自律的な意思決定を通じて行動をコントロールすることを目指している。刑罰や行政罰、あるいは損害賠償義務などを使う方法、税金や賦課金といった金銭を徴収する方法、逆に税制上のユウグウ措置やその他の経済的利益によつて誘導する方法、違反者の氏名や名称を公表する方法、こういった方法はすべてインセンティブを用いている。

多くの人にとつて法は、「強制のための手段であると同時に「意思決定に影響を及ぼす要素」として立ち現れる。法はインセンティブを提供するための道具なのである。

このように人間行動をインセンティブの観点から捉えるのには大きな意味がある。というのは、他者の行動を説明しようとするとき、性格や気質といった内的要因を過度に重視する一方で、環境や状況などの外的要因を軽視する傾向が私たちに<sup>(1)</sup>あるからである。

たとえば、ある組織に属する人が違法行為をしたという事件を見聞きすると、たとえ真の原因が別の点にあつたとしても、その人の性格に原因を帰属させがちである。これは「基本的帰属錯誤」または「対応バイアス」と呼ばれるが、インセンティブの概念を頭の片隅に置いておけば、こうした錯誤は少なからず防げるだろう。

法と人間行動を考えると、法がいかなるインセンティブを与えられるのか、そして法の意図するインセンティブと現実のインセンティブがどのくらい合致しているのか、ということである。<sup>(2)</sup>しかし、これらは十分に説明されているとは言いがたい。

その一因は、行動に対する法の効果を研究する人たちが外発・内発の二分法にこだわりすぎていたという事情にある。つまり、「法が発動する正または負のサンクションによる外からの動機づけ」と「法の正統性や道徳に関係する内からの動機づけ」のどちらがより重要か、という問題設定が幅を利かせていたのである。

実際には、先ほど述べたように、外発と内発はあまりはつきりとは区別できない場合がある。それと同様に、法も意思決定に対しては微妙な形で働きかけをしている。

例を挙げよう。心優しい甲さんは、他の人たちのためになることをしたいと願っている。ここで、行為X(例・エコ商品の購入、シートベルト着用、予防接種など)を奨励するルールが定められたとする。甲さんはこのルールができたのをみて「Xはいろんな人たちの利益に適うのだ」と推論し、積極的にXを行うようになった。さて、甲さんがルールに沿う行動をとったのは、外発的インセンティブによるのだろうか、それとも内発的動機によるのだろうか？

インセンティブは私たちが意識していないところで影響を与えてもいる。ある実験研究によれば、お金のことを考えるだけで人々の充足感が高まり、他者に依存しない(させない)個人主義的傾向が強くなるのだという。こうなると、何が外で何が内かはずすすわからなくなる。金銭の効果だけでも複雑なのだから、法の効果はなおさらである。

帽子をとり損ねた太陽と同じように、インセンティブは逆効果を生むことすらある。法との関連性で最も引用されているのは、次のフィールド実験であろう。実験の対象となったイスラエルの民間の託児所(一〇か所)は、一歳から四歳までの幼児を三〇名ほど預かっていた。親が所定の時間に遅れて子を引き取りに来たときに罰金を徴収すると、親の遅刻は減るだろうか。それを調べるため、一〇施設のうち六施設では親が一〇分以上遅刻した場合に罰金を徴収することになった(一方、残りの四施設は徴収しなかった)。すると、罰金制度を導入しなかった四施設と比べ、導入した六施設では遅刻する親の人数が有意に増加する、という結果が観察された。しかも興味深いことに、罰金制度をやめた後も、六施設では遅刻率は高止まりしてしまっただのである。

この実験結果には何とおりかの解釈がありうるが、その一つに「罰金の導入によって人々の状況把握のしかたが変化した」という解釈がある。すなわち、所定の時間を経過した後も子供を預かる託児所側の行動が、「好意で行っていること」ではなく「お金を取って行うサービス」として認知されるようになった、という解釈である。言い換えると、罰金導入により、非金銭的

であった社会的交換関係が金銭ベースの取引関係に変質したのである。

これ以外に、インセンティブが内発的動機づけを阻害すること(クラウディング・アウト)を示唆する研究は数多く存在する。インセンティブの働き方を私たちが正確に理解できるようになるまでには、まだまだ長い道がありそうである。

(飯田高『法と社会科学をつなぐ』有斐閣 二〇一六年より。出題の都合により、一部改変した箇所がある。)

(注) サンクション ここでは、ある行為に対する肯定または否定の意味を持つ反応をいう。

問一 傍線部(a)～(d)のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 傍線部(1)について、「北風と太陽」の寓話にこのような解釈がなされている理由を、本文の内容に基づき、「インセンティブ」という言葉を用いて、六〇字から八〇字で説明しなさい。

問三 傍線部(2)について、著者はなぜそのように考えているのか。本文の内容に基づき、一〇〇字から一二〇字で説明しなさい。

問四 傍線部(3)について、本文で示された実験結果に基づき、一〇〇字から一二〇字で具体的に説明しなさい。

## II

次の文章を読んで、後の問い(問一～問三)に答えなさい。

フランス語に「パニユルジュの羊みたいに」という表現があつて、付和ふわふたぞう雷同する様をさす言葉である。智慧者のいたすら屋パニユルジュの物語に由来するのだという。彼を笑ひ者にした商人から、リーダーと思しき羊を一匹買い取つたパニユルジュが、すぐさま羊を海に投げ込むや、残りの羊もみな海に飛び込んで、商人は大損をしたという故事である。

人間誰しもの心には、多かれ少なかれ付和雷同の習性が根深く巢食つている。パニユルジュならぬわれわれはむしろ、付和雷同心を逆手にとつた賢い商人たちの宣伝にのつて、日々細々と損をする消費者となつたりする。

ものごとを決めるときに他人の判断に頼る傾向と、それがもたらす社会的な帰結については、数理物理学的社会学の大家、ダンカン・ワッツ博士の有名な研究を見るのがよい。「人工的文化市場における不平等と予測不能性の実験的研究」と題された2006年の論文で、アメリカの「サイエンス」誌に掲載されている。

ワッツ博士のグループは、インターネット上に音楽ダウンロード・サイトを作つた。サイトの訪問者は1万5千人近くに上り、彼らが被験者となつたわけである。訪問者はみな、18組の新人アーティスト・グループの手になる48曲のリストを見せられる。曲はどれも試聴可能で、訪問者は曲に1から5の評価をつけたのちに、1曲ダウンロードできるといふ仕組みである。

訪問者たちは、彼ら自身気づかぬ間に、9つあるグループのどれかに振り分けられる。振り分けられた各訪問者の画面には、それぞれのグループ内での曲の評価の集計が、ポイントとして表示されるようになっていく。つまり各訪問者は、それまでの他の訪問者の評価の集計を見ながら、自分の評価を下すわけである。ところが第一のグループだけ特殊で、ここでは他の訪問者の評価は表示されない。つまり第一グループでは訪問者は自分の耳と感性だけで曲を評価するわけである。そして残りの8つのグループは、同じ0評価から出発して、他人の意見を見ながらの評価が積もっていく、いわば8つの並行世界となる。

実験結果を一言で言うと「付和雷同の心が超人気曲をランダムに生み出す」である。

各人が独立に判断する第一グループでは、人気のある数曲、全く人気のない数曲、その間にある中間的評価の多くの曲、と評価の分布はなだらかであった。一方他人の評価を見ながらのグループでは、数曲の非常に突出した人気曲があつて、それらが残りの一般曲を圧倒していた。

実験は2回に分けて行われ、最初の実験で訪問者が見せられるのは、3行に分けてランダムに並べられた曲の表であつた。一方2回目の実験では曲は評価の数字の大きい順に1行に並べられた。1回目の実験で見られた人気曲とそれ以外への分極は、2回目の実験ではより極端になつて観測された。

<sup>①</sup> 技術的に言うと、観測された曲の人気分布のジニ係数は、1回目の実験ではおよそ0・4、2回目の実験では0・5を超え  
るほどであつた。両方の実験とも他人の評価を見ない参照データとなる第一グループでは、ジニ係数は0・25であつた。

ちなみに読者諸氏の多くもご存じのとおり、ジニ係数というのは、すべての曲が同じ投票数ならば0、一曲だけに全投票が集まる場合に1となる、不平等さの度合いを測る統計量である。

面白いのは、全グループ共通の人気曲がある一方で、各々のグループだけで大人気となる曲も必ず見られる点である。全グループで不人気な曲というのも見つかる。全グループ共通の人気曲や不人気曲は、他人の判断を参照しない第一グループでも、やはり人気曲や不人気曲として登場する。これらは誰しもが認める名曲そして駄曲と見なせるだろう。そして各グループごとに特有なバラバラの人気曲のほうは、おそらくは「人気があるから人気がある」という付和雷同の群集心理が作り上げた、<sup>②</sup> 内的価値に基づかない人気曲と考えるべきであらう。

初期段階である曲にたまたま高評点が重なつて、雪だるま式に評価を上げて大人気曲へと成長する、というわけである。どんなに手を尽くしてもあらかじめヒット曲を予測できない、というのが音楽業界の悩みであるが、これもそう考えると納得できる。

音楽をはじめとした芸術芸能、あるいは言論界や政治の世界まで含めて、みなの人気投票で優劣を定める分野は、「少数の



天才」と「凡庸なそれ以外」にはつきり二分される世界になりがちで、名声、収入、権威もそれに従って分配される習わしになつてゐる。しかしながら、ワッツ博士たちの社会実験から判断すると、この鋭い二分は、才能や適性の分布に起因するといふよりも、われわれ人間の付和雷同の心によつて発生する、社会的な構成物だと考えたほうがよさそうである。

成功は才能と時の運、というわけである。

と、こういう話を夕食どきに家人に向かつて喋つていたら、

——学者つて面白い人達ね。そんなの誰でも知つてることじゃない。ネイチャアとかサイエンスとか、常識をご大層な実験で確認するそんな論文でいっばいなわけ？

という答えが返つてきた。

——いやまあ、そうかもしれないけど、きちんとコントロールされた再現可能な条件で、科学的に行なわれた実験つてのは、ただのお茶飲み話とは少しは違ふし。それにこういう風にジニ係数とか使つて定量的にできるようになったら、これそのままマーケティングとか世論誘導とか、いろいろ実用的な応用があるだろうし。

と、私も一応抗弁を試みる。予想通り家人からきつぱりとした言明が返つてきた。

——そうやつて精密にして、数理社会学だか社会物理学だか知らないけど、科学的な道具に仕立て上げたら、その使い道が営利企業のマーケティングなのね。それとなんでしたつかけあの、ケンブリッジなんかの、アメリカ大統領選で世論操作を主導したコンサルティングファームとか。まあ物理学者や数学者のダークサイド<sup>(3)</sup>への墮ち方もいろいろね。

これ以上は夕食の場に不適當なことが明らかだったので、先週末に行った足摺の先の柏島の、透明な海の上に飛んで見えた船の情景に、あわてて話題を切り替えた。

自らの判断がつきにくい事項について、多数の他者の判断を参考にしてものを決める習性は、おそらくは長い先史時代に人

類が獲得した形質なのだろう。そこでは狩りの獲物についても果実の豊富な茂みについても情報が乏しく、他者からの伝聞は貴重な判断材料であつたはずだ。また集団の素早い意思統一のためのメカニズムとして、付和雷同の心性はとても効率的である。競合する敵対的集団に囲まれた原始部族社会で、これは組織防衛上必要不可欠のものだつたらう。

人間に限らず広く動物界を見ても、多数の他者の判断に従う行動は、多くの場面で種の繁栄にとって有利だつたに違いない。それは8の字ダンスで方向を伝えて、瞬く間にコロニーの皆が良い餌場に殺到する、ハチたちの習性を見ても明らかである。

インターネットで万人がつながつた今の世で、人間だれしもがもつ付和雷同の心性が、時として暴走して大小の不都合をもたらす様を、われわれは日々目撃している。おそらくそれは、食料調達が困難であつた先史時代に適応した人体が、飽食の現代に不適應を起こして、世に肥満が蔓延するのと類似の現象なのだろう。

不都合を正すにはことからの正確な理解が前提になる。数理的な社会学のメスがもし本当に価値のあるものならば、それは私企業の営利追求の手助け以外にも用いられるだろう。社会制度の賢い設計を通じて、人々が宣伝や世論操作のたやすい餌食となり、パニエルジュの羊のように次々入水するのを防ぐ手立てが見つかるだろう。

今一度われわれ科学者が、ダークサイドから這い上がる時が来るであろうか。その時こそはすべての家庭の夕餉どきに、こうした話題を平和に持ち出せるようになるのではないか。

(全卓樹『銀河の片隅で科学夜話』朝日出版社 二〇二〇年より。出題の都合により、一部改変した箇所がある。)

問一 傍線部(1)にある三つのジニ係数の値の違いについて、ワッツ博士のグループの実験結果をふまえて、二〇〇字以内で説明しなさい。

問二 傍線部(2)「内的価値に基づかない人気曲」はなぜ生まれるのか。著者が援用する故事の意味をふまえて、一一〇字から一三〇字で説明しなさい。

問三 傍線部(3)「ダークサイド」と表現されたのはなぜか、六〇字から八〇字で説明しなさい。

III

次の文章は、江戸時代後期の人、橋たちばなななけい南谿による『西遊記』の一節で、筑前の国にある崇福寺そうふくじで聞いた話を書きとめたものです。文中の「この国」は筑前国であり、文中に見える鐘の岬・織幡山・志賀・宗像などの地名も筑前のものです。これを読んで、後の問い(問一〜問七)に答えなさい。なお、本文は一部改変したところがあります。

この国の海中に鐘あり。その所を鐘の岬かねのさきといふ。織幡山おりはたの良の方うしろ、岸を離るること、わづかに五町(注1)ばかりの所にあり。船にてその所に至れば、よく見ゆるよし、里人いふ。これはむかし三韓(注2)より撞鐘つぎかねを船に積みて渡せしに、竜神その鐘を望み、この海に至りて、波風にはかに起り、船くつがへりて、鐘はつひに海底に沈みぬ。三韓より渡りしことはふるきこと(注1)にや、万葉集の歌にも、

千早振る鐘の岬を過ぐれども我は忘れず志賀の皇神(注3)  
読人しらず(注4)  
と出でたり。また、新古今にも、

白波の岩打つ音やひびくらん鐘の岬の暁の空(注5)  
衣笠内大臣  
また、家の集(注6)

音にきく鐘の岬はつきもせずなく声ひびくわたりなりけり(注7)  
俊頼  
また、大名寄(注7)に、

聞きあかす鐘の岬のうき枕夢路も波に幾夜へだてぬ  
誰取りあげんとせし人も無かりしに、当君の先祖、黒田長政、この国の太守となりて、「この崇福寺を菩提寺に取り立て、いまだ程よき鐘もなければ、新たに造り鑄いんよりは海中にある鐘こそ名高き鐘なれば、引き上げてこの寺に寄附せん」とありしを、諸臣皆、「この鐘は竜神の惜しみ給ふと古来より申し伝へ候へば、今更引き上げ給はんもおそれ有り」と諫めしに、元来、長政勇将なれば、聞き入れ給はずして、「我が用にて我が領内にある物を取るに、竜神とて惜しむやうやある。早くも海より引き上げよ」とて、数十艘さうの船を浮べ、鐘の竜頭(注8)に大綱をおびた

しく懸けて、海より岡に引き連ね、数千人の力を以て、曳(えい)声(こゑ)を出して引きたりしに、その鐘少し動くやいなや、大空にはかにかきくもり、天地闇夜のごとく成りて、大風、波を巻き返せば、船砕け、綱切れて、人も大半潮に溺れて漂ひければ、つひにそのこと遂げざりけり。太守なほ怒り給ひしかども、諸臣強ひて諫めとどめしかば、やむことを得ずして、そのままに捨て置き給ひぬ。

その後、三、四代目の太守、勇気殊に勝れ給ひぬるが、この鐘のことを聞し召し、「何(な)でふことやあるべき。その日に折あしく風の吹きければこそ不思議にも思ひつれ。<sup>(4)</sup>たとひ竜神いませばとて、領主にいかで敵すべきや。この鐘引き上げ得ざるこそ口惜しけれ」とて、諸臣の諫めを用ひず。用意を丈夫にせよとて、髪毛を入れてよりたる大綱をおびたたく鐘の竜頭にまとい、船数艘(たぶら)に大石を数多く積み入れて、船の足を深く沈め、かの鐘の上に至り、鐘に付けたる綱を船にきびしくまとひ付けて、かの積みたりし大石を海中へなげ捨てたりしに、船やうやくに浮くにつけて、鐘もやうやう動く程こそあれ、案に違はず、震動雷電して風おびたたく吹き起り、雲は墨をときしがごとく、大波、山を砕けば、<sup>(5)</sup>なじかはもつてたまるべき、船も人も微塵(みじん)になり、鐘も竜頭に砕けて横さまに成り、また、海底に沈みたり。それより大波、陸(か)にのぼり、人家、田地、大に破壊し、人民のなげき大かたならず。

不思議なるは、その潮に連れて、翁(おきな)の面、<sup>(注10)</sup>一つあがり来りたり。その面、<sup>(注11)</sup>希代の作にして、なかなか世間の物にあらず。太守には、なほも争ひ給ふべき気色なりしかど、人民の歎きなればとて、諸臣諫めしにより、かつは竜神より鐘のかはりの心にてや、希代の面を打ちあげたりしことなれば、太守にも思ひ留り給ひて、鐘はつひに人間の手に入らず、殊に横さまになり<sup>(6)</sup>て、竜頭さへ砕けたれば、ふたたびあげんたよりもなくなりぬ。<sup>(7)</sup>面は奇異の物なりとて、宗像(むなかた)の宮に納めて、今にかの宮に伝はれりとぞ。鐘はこの寺崇福寺に納まるべかりしを、かく竜神の愛せるといふにより、永く海底の物とはなれり。

(注1) 五町 「町」は距離の単位で、一町は百メートル強。

(注2) 三韓 古代の朝鮮半島にあった三つの国の総称。

(注3) 過ぐれども 万葉集のこの歌は、「過ぎぬとも」と訓することが現在は多い。

(注4) 志賀の皇神 志賀にまつられている海の守り神。

(注5) 衣笠内大臣 鎌倉時代前期の歌人、藤原家良。

(注6) 家の集 個人の歌集。ここでは源俊頼の『散木奇歌集』。源俊頼は平安時代後期の歌人。

(注7) 大名寄 「なよせ名寄」は、名所に関する事物や歌を集めて書物にしたもので、この「大名寄」は『類字名所和歌集』と見られ

る。

(注8) 竜頭 釣鐘をつるすために突起させて穴を開けてある部分。

(注9) 曳声 力を入れるときに発する声。

(注10) 翁の面 能楽の翁に用いる面。

(注11) 希代 世にもまれな様子。

問一 傍線部(1)について、そのように見なされた根拠はどのようなことであるのか、説明しなさい。

問二 傍線部(2)の和歌について、「つきもせず」の掛詞に留意しつつ、現代語訳しなさい。

問三 傍線部(3)を現代語訳しなさい。

問四 傍線部(4)を現代語訳しなさい。

問五 傍線部(5)を現代語訳しなさい。

問六 傍線部(6)を現代語訳しなさい。「竜頭」の語は、そのまま使つてよい。

問七 傍線部(7)について、なぜこの面は「奇異の物なり」と見なされたのか、本文に即して説明しなさい。